

中18期 1939.4~1944.3
昭和14年~昭和19年

我々住吉中学校18期生は昭和14年に入学した。15年に入ると世間の戦時色が急に激しくなった。教護連盟（教師達の盛り場巡視隊）が当時軟弱と言われた生徒を探して歩いていた。映画はニュース映画か文部省推薦しか見られなかった。配属将校による軍事教練が強化された。16年末には英語教育への締め付けが厳しくなった。

冬季の手袋着用が禁止されてズボンのポケットが縫い合わされた（手が入られない）。食糧事情は年々悪くなっていった。校舎の窓にはXが貼られた（爆撃によるガラス破片の飛散防止）。時々先輩たちによる予科練や少年飛行兵の応募への勧誘演説会が開催された。

上の学校への入学試験では圧倒的に理科系に集中した。理科系には召集猶予があったからだ。思い出すのも辛い時代を過ごした。

（江浪秀雄/弟、高4期江浪聰雄代筆）

■ 住中への空襲
—小林衛先生「思い出」より—

私が住中（当時は学制上中学校）に奉職していたのは、昭和十六年から二十年までの四年半です。この間は戦時色の濃い殺風景な時期なのに大変愉快に勤められたのも、住中のふんいきがやわらかく住みよい所だったせいだと思います。次に印象の深いものを二、三記してみましょう。

—— 野外演習 ——

私が五年生を受持っていたある夏。生徒諸君と共に和歌山県に野外演習に行った事があります。生徒諸君は重い背嚢を負い鉄砲かついで、長い道中を汗びっしょりになって行軍したあげく、夜は海岸の砂原に野宿したことがあります。海岸の砂上は涼しくてよかろうと思っていたのに、蚊が多くて昼の疲れにもかかわらずなかなか眠れない。生徒諸君はどうしているかと、

真夜中に一人見まわったら、月光の戦場に死体が散乱しているような光景を見て、ぞっとしたことがあります。よく見ると、どの生徒もみな頭から衣類等をかぶって蚊を防いで、軍装のまま眠っていた。あの時ばかりはほんまに生徒諸君が可哀想でならなかった。

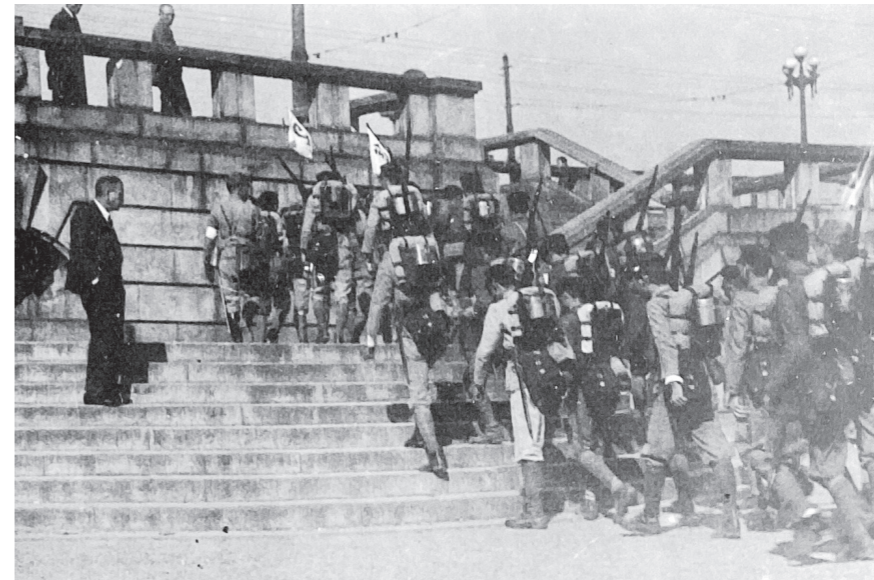
—— 住中の空襲 ——

六月十五日の昼間空襲は丁度わが住中が見舞われた時あの当時住中には、大阪の南部防衛司令部があって、屋上には木造の小屋が相当数建てられ、兵隊さんが常時見張っていました。

あの日のB29の編隊は丁度わが校を目標としたもののように思われ、あの周囲だけがやられたようでした。屋上の小屋は全部燃え、周囲の民家も多数やられました。あの当時、私は校内の防火班長だったので、爆撃のあい間に飛び出しては消火につとめました。勇かな生徒諸君がつづいて来て働いてくれました。三階の教室や廊下のあちこちに焼い弾がくすぶっているのを火たたきで消して廻ったものです。その内にまもなく次の編隊が来るので、急いで階下に逃げこむのです。壁にぴったりと身をつけていると、近くの場所にパンパンと弾が落ちてくるので、他の所に逃げるのです。兵隊さんもいましたが、われわれの方が勇敢だったようでした。無理もないことで、われわれに取ってはこの校舎はかけがえのない愛する学校ですもの……。

幸いに、この日には周囲の民家があれだけやられたのに、わが校が無事だったのは何よりでした。空襲が済んだ後のぼう然としたあの光景は印象深く残っています。あの時の防火班員諸君には、この紙上で心から感謝します。（昭和二七年）

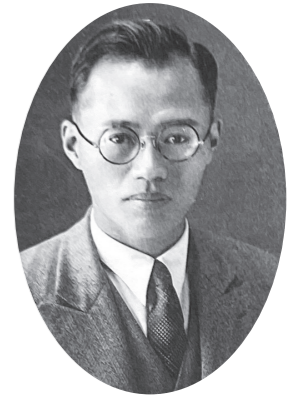
（昭和62年11月発行「すみよし外史」より）



中18期卒業アルバムより



住吉中学農園の作業（昭和16年）



小林衛先生
（中16期卒業アルバムより）

世の中の出来事（1939年）

- ノモンハン事件 ●第2次世界大戦勃発 ●国家総動員法 ●白米禁止令 ●学生の長髪、パーマ禁止 ●チリで大地震

卒業生数

248名（準卒を含む）